

木藤会長 記者会見 発言要旨

(2022年12月19日)

1. 「石油業界のカーボンニュートラルに向けたビジョン」の改訂

本日、石油連盟は「石油業界のカーボンニュートラルに向けたビジョン(目指す姿)」を改訂した。同ビジョンは、これまで2050年に事業活動に伴うCO₂排出(「Scope1+2」)実質ゼロを目指すとしていたところ、今般、SAFの国内生産や供給、さらには水素・アンモニア、合成燃料などの導入に向けた技術開発がスタートしたことを受け、供給する製品に伴うCO₂排出(「Scope3」)実質ゼロにもチャレンジすることとしたものである。「Scope3」の実質ゼロは、極めて野心的でハードルの高い目標である。石油各社は、脱炭素技術の研究開発と社会実装に積極的に取り組むことにより、社会全体のカーボンニュートラルの実現に貢献するとともに、引き続き消費者が求めるエネルギーの安定供給に努めていく。

2. GX 経済移行債

11月29日に開催された第4回GX実行会議において、CO₂排出削減と産業競争力の強化、経済成長を両立させるため、今後10年間で約150兆円超の官民投資を実現すること、そのために政府においてGX経済移行債を活用した大胆な投資支援を行うなどの方針が示された。石油業界としてもGX経済移行債などの支援措置を活用しつつ、2050年ビジョンの実現に向けた取り組みを強化していきたいと考えている。

3. ロシア産原油等に係るプライスカップ制度

政府は、今月5日より、ロシア産原油等に係る上限価格措置、いわゆるプライスカップ制度を開始した。サハリン2で生産された原油を除き、上限価格である1バレル当たり60ドルを超えるロシア産原油の輸入が規制されることとなる。本制度は、国際平和のための努力に対する我が国の貢献と世界的な原油需給と原油価格の安定化を両立させるため、G7各国が協調して措置されたものと承知している。石油業界としても、こうした取り組みが功を奏することを期待している。

4. 原油市況について

原油価格(ドバイ)は10月には90ドル台、11月に入って80ドル台、そして12月には一時70ドルに限りなく近づくとところまでやや弱含みで推移しているが、これは各国中央銀行の利上げによる世界経済減速懸念による下落傾向である。

直近の原油価格上昇要因としては、12月7日のカナダから米国に至る原油のパイプラインであるキーストンパイプラインの原油流出事故による稼働停止があるが、現在復旧に向けた取り組みをしていると聞いている。

中国のゼロコロナ政策は、各地区で起きているデモ等を受けた中国当局の規制緩和が行われた途端に感染者数が急増している状況にあり、実質的にはコロナ影響収束による景気上昇というのは難しい状況にあるため、引き続き下落要因の一つとなっている。

OPEC プラスは、10月5日に開催された閣僚会合において、11月以降の生産目標を8月対比200万BDの減産で合意したが、ナイジェリア等の一部産油国の目標未達が続いていることから実質的な減産量は70万BD程度にとどまっていると見ている。

12月5日からEUのロシア産原油の禁輸措置が発効された。11月時点で欧州のロシア産原油の輸入量はかなり減少しており、既にナイジェリアあるいは米国等からの代替原油の調達が進んだものと見ている。したがって、このロシア産原油の禁輸措置に関しては大きな混乱原因にはならないのではないかと見ている。

ロシア産原油のプライスカップ適用については、現時点では大きな上昇要因には至っていない。プライスカップの水準がなかなか決まらなかったが、60ドルという上限が設定された。60ドル以下であればロシア産原油を輸入してもいいということになるが、一部報道によれば、プーチン大統領はプライスカップの適用国へ供給しない可能性があるとも報じられている。正式にどういう動きになるかはまだ見えていない状況である。

このような状況のなか、向こう一か月間の原油価格の見通しは、前月の会見での見通しから10ドル下方修正し、70ドルから85ドルのレンジで動くのではないかと想定している。今後の上昇要因としては、先述のキーストーンパイプラインの復旧がどうなるか、プライスカップがどのような形で機能するかということが挙げられるが、現時点ではやや不透明な状況である。また、北半球が冬期に入り、気温低下によるエネルギーの需要増があるのかも影響する。一方、下落要因としては、中国のゼロコロナ政策がどうなるか、欧米の金融引き締めによる景気後退がどう推移するかということが挙げられる。

また、今後の原油価格の見通しに影響を及ぼすイベントとしては、来年1月末に開かれるFOMC会合、2月5日に予定されているEUによるロシア産石油製品の禁輸措置の発効、少し先にはなるが6月4日のOPECプラス閣僚会合があり、注視していかなければいけないと考えている。

以上